

南八幡遺跡 13

—第23次調査報告—

2024

福岡市教育委員会

南八幡遺跡 13

—第23次調査報告—



遺跡略号：MHM-23

調査番号：2216

2024

福岡市教育委員会

序

福岡市は古代より大陸・半島との文化交流の門戸として発展し、双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。市内には埋蔵文化財をはじめとした重要な文化財が数多く残されており、近年の著しい都市化により失われるこれらを後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建設事業に伴う南八幡遺跡第23次発掘調査について報告するものです。この調査では古代の竪穴住居のほか掘立柱建物や土坑、昭和の防空壕などが発見され、当時の人々の生活を考えるうえで重要な成果を得ました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例言

1. 本書は福岡市教育委員会が福岡市博多区竹丘町一丁目10番1の一部の共同住宅建設に先立ち、令和4(2022)年度に実施した南八幡遺跡第23次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3. 本書の執筆と編集は岩熊拓人が担当した。
4. 本書の遺構の実測図作成および写真撮影は岩熊が行った。
5. 本書の遺物の実測図作成は久富美智子、岩熊が行い、挿図の製図は加藤恵里子、増永好美、岩熊が行った。また遺物の拓影作成および写真撮影は岩熊が行った。
6. 本書で用いた方位は磁北で、真北から7°20′西偏する。
7. 調査で検出した遺構については、竪穴住居をSC、掘立柱建物をSB、土坑をSK、不明遺構をSXとし遺構の種別にかかわらず1から始まる通し番号を付した。
8. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので活用されたい。

遺跡名	南八幡遺跡	調査回数	23次	調査略号	MHM-23
調査番号	2216	分布地図幅名	012 麦野	遺跡登録番号	0051
申請地面積	377.68 m ²	調査対象面積	118.17 m ²	調査面積	98.9 m ²
調査期間	2022年6月27日～2022年8月10日		事前審査番号	2021-2-1262	
調査地	福岡市博多区竹丘町一丁目10番1の一部				

本文目次

I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の記録	2
1. 調査の経過と概要	2
2. 基本層序	5
3. 遺構と遺物	6
IV まとめ	11

挿図目次

図1 調査地点周辺遺跡分布図	3	図9 SC030 出土遺物実測図	8
図2 南八幡遺跡調査地点位置図	4	図10 SB001 遺構実測図	9
図3 第23次調査地点位置図	4	図11 SX077 遺構実測図	9
図4 調査区北西壁土層図	5	図12 SX078・SX079・SX080・ SX081 遺構実測図	10
図5 遺構配置図	5	図13 SK070・SK082 遺構実測図	11
図6 SC030 遺構実測図	6	図14 SK070出土遺物実測図	11
図7 SC030 竈遺構実測図	7		
図8 SC030-1・SC030-2 遺構実測図	7		

写真図版目次

Ph.1 調査区全景 (南東から)	12	Ph.12 SX078・SX079 完掘状況 (南東から)	14
Ph.2 SC030 検出状況 (南東から)	12	Ph.13 溝状遺構完掘状況 (北から)	14
Ph.3 SC030 貼り床検出状況 (東から)	12	Ph.14 SK070 防空壕 (南東から)	14
Ph.4 SC030 土層 (南から)	13	Ph.15 2	15
Ph.5 SC030 竈検出状況 (西から)	13	Ph.16 3	15
Ph.6 SC030 竈北壁赤変部分 (南西から)	13	Ph.17 4	15
Ph.7 SC030 土層 (南から)	13	Ph.18 8	15
Ph.8 SC030-1・SC030-2 検出状況 (東から)	13	Ph.19 9	15
Ph.9 SC030-1・SC030-2 完掘状況 (東から)	13	Ph.20 11	15
Ph.10 SB001 (南東から)	14	Ph.21 13	15
Ph.11 溝状遺構検出状況 (東から)	14	Ph.22 18	15

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、福岡市博多区竹丘町一丁目 10 番 1 の一部（敷地面積：377.68 m²）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和 4（2022）年 3 月 9 日付で受理した。（事前審査番号：2021-2-1262）。

これを受けて経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である南八幡遺跡に含まれること、かつ当該地で過去に行われた確認調査で、現地表下 30 cm で堅穴住居が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。協議の結果、予定建築物の構造上埋蔵文化財への影響が回避できないことから、記録保存のため発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和 4 年 5 月 20 日付で株式会社リビングコーポレーションを委託者、福岡市を受託者として埋蔵文化財発掘業務委託契約を締結し、同年 6 月 27 日から 8 月 10 日に発掘調査、令和 5 年度に資料整理および報告書作成を実施した。

申請地 377.68 m²のうち調査範囲は 98.9 m²であり、それ以外の範囲は現状保存を行っている。

2. 調査の組織

委託者：株式会社リビングコーポレーション

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和 4 年度）

調査総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長	菅波 正人
	同課調査第 2 係長	井上 蘭子
調査庶務：	文化財活用課管理調整係長	石川 あゆ子
	同課管理調整係	内藤 愛
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係長	田上 勇一郎
	同課事前審査係主任文化財主事	森本 幹彦
	同課事前審査係文化財主事	三浦 悠葵
調査担当：	埋蔵文化財課調査第 2 係文化財主事	岩熊 拓人

（整理・報告：令和 5 年度）

整理・報告総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長	菅波 正人
	同課調査第 2 係長	井上 蘭子
整理・報告庶務：	文化財活用課管理調整係長	石川 あゆ子
	同課管理調整係	内藤 愛
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係長	田上 勇一郎
	同課事前審査係主任文化財主事	板倉 有太
	同課事前審査係文化財主事	神 啓崇
		三浦 萌
整理・報告担当：	埋蔵文化財課調査第 2 係文化財主事	岩熊 拓人

Ⅱ 遺跡の立地と環境

南八幡遺跡は、那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地にある春日原丘陵の東辺に並行して延びる台地上に位置する。この台地は北西方向から多くの谷が入り込み複雑な舌状台地をなしている。この台地上には南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、中野原遺跡、麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡が点在している。

南八幡遺跡はこれまでに26次にわたる調査が行われ（2024年3月現在）、旧石器時代から平安時代までの遺構や遺物が確認されている。旧石器時代においては第1・3・9次調査では尖頭器や剥片が出土し、第12次調査ではナイフ形石器や台形石器、剥片などが300点以上まとまって出土している。縄文時代には第6・7次調査で落とし穴と考えられる遺構が確認されている。弥生時代には集落が拡大し、第5・9・12・19次調査では竪穴住居や掘立柱建物が確認されている。古墳時代になると遺構が減少するが、第2・3次調査では竪穴住居や掘立柱建物がまとまった数確認されている。

古代になると集落は急速に拡大する。8世紀初めから末にかけての奈良時代には竪穴住居や掘立柱建物、土坑、井戸などが確認されている。周辺遺跡でも同様の傾向がみられるようで、雑餉隈遺跡、中ノ原遺跡、麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡でも当該期に集落の拡大が確認されている。9世紀になると集落は急速に縮小し、竪穴住居は全く見られなくなり、ほかの遺構もほとんど見られなくなる。

本調査地点は遺跡の東端に位置しており、地形としては丘陵の端部になる。調査地点の北側は谷になっており、北側の丘陵上には麦野C遺跡が所在している。調査地点の西で行われた7次調査では8世紀の竪穴住居が確認されていることや、遺跡の性格から本調査地点でも8世紀の集落の存在が想定された。

Ⅲ 調査の記録

1. 調査の経過と概要

第23次調査地点は以前は宅地であり、調査範囲は共同住宅の建設予定範囲である。調査区中央の地表面の標高は19.6m前後を測り、敷地の北側は谷になっており北側の道路との境界部の標高は18.2m前後を測る。確認調査では申請地の西側において地表下30cmのローム層で竪穴住居が確認されている。一方で申請地のそれ以外の場所では遺構はほとんど検出されず、遺構の確認された部分との高低差が大きいことから、削平を受けて遺構が残存していないことが確認された。以上の点から今回の調査範囲が設定された。ローム層を遺構検出面として設定し、重機で表土掘削を行った。調査区南側は標高19.3m、中央部は標高19.0m、北側は標高18.1mでローム層を検出している。

遺構は古代の竪穴住居、土坑、掘立柱建物、柱穴、昭和の防空壕と考えられる土坑を検出している。遺物は土師器、須恵器、陶磁器、瓦、金属製品、石器などパンケース4箱分出土した。

遺構実測は調査区の形状にあわせて任意に設定した基準線をもとに1/20の平面実測を行った。標高は街区多角点から移動した。写真撮影は35mm判モノクロ・カラーリバーサルフィルム、6×7判モノクロ・カラーリバーサルフィルムおよびデジタルカメラを用いた。

2022年6月27日に機材搬入を行い6月28日に表土掘削、6月29日から8月8日まで調査を行い、8月9日に埋め戻し、翌10日に全作業を終了した。



1. 南八幡遺跡
2. 東那珂遺跡
3. 那珂君休遺跡
4. 板付遺跡
5. 板付東遺跡
6. 高畑遺跡
7. 麦野 A 遺跡
8. 麦野 B 遺跡
9. 麦野 C 遺跡
10. 雑餉隈遺跡
11. 中ノ原遺跡
12. 井相田 D 遺跡
13. 仲島遺跡
14. 井相田 C 遺跡
15. 井相田 E 遺跡
16. 井相田 A 遺跡
17. 井相田 B 遺跡
18. 比志遺跡群
19. 那珂遺跡群
20. 五十川遺跡
21. 諸岡 A 遺跡
22. 諸岡 B 遺跡
23. 菅原遺跡
24. 三軌遺跡
25. 井尻 A 遺跡
26. 井尻 B 遺跡
27. 井尻 C 遺跡
28. 三宅 C 遺跡
29. 横手遺跡
30. 寺岡遺跡
31. 笠拔遺跡
32. 日住遺跡
33. 上日住遺跡
34. 高塚遺跡
35. 弥永原遺跡
36. 下月隈 D 遺跡
37. 下月隈鳥越遺跡
38. 天神森遺跡
39. 下月隈 A 遺跡
40. 下月隈 B 遺跡
41. 上月隈遺跡
42. 下月隈 C 遺跡
43. 上月隈 B 遺跡
44. 立花寺 B 遺跡
45. 文殊谷遺跡
46. 立花寺遺跡
47. 金隈遺跡
48. 金隈上屋敷遺跡
49. 川原遺跡(大野城市)
50. 笠森遺跡(大野城市)
51. 安松遺跡(大野城市)
52. 須玖・岡本遺跡(春日市)

図1 調査地点周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



图2 南八幡遺跡調査地点位置図 (S=1/2,500)

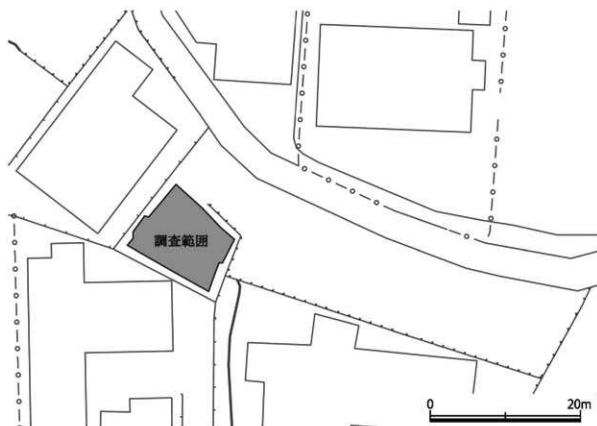


图3 第23次調査地点位置図 (S=1/500)

2. 基本層序 (図4)

下図は調査区北西壁の土層図である。竪穴住居以南は近代の攪乱と整地によってローム層が削平を受けているため図示していない。既存建物の建設時の整地(1層)の下が、近代の黒茶色土(2層)になる。その下は黒灰色粘質土(6層)になり、竪穴住居はこの面から掘りこまれている。調査区北側から傾斜が急になっており谷の斜面部とみられる。

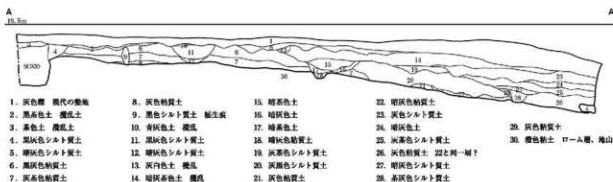


図4 調査区北西壁土層図 (S=1/40)

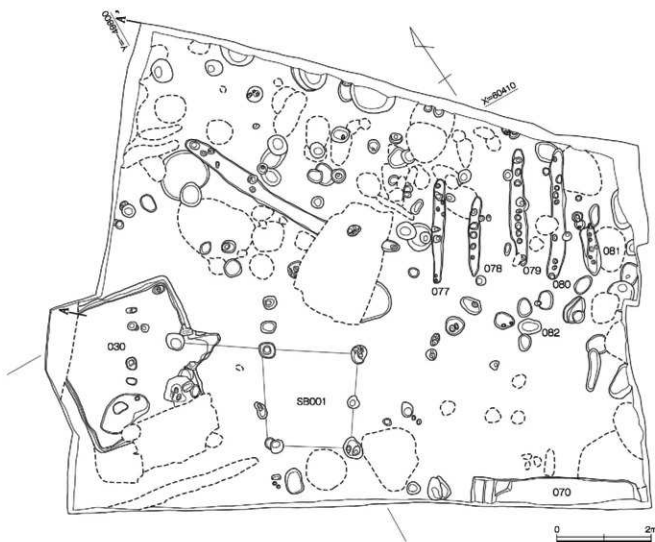


図5 遺構配置図 (S=1/80)

3. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居

SC030 (図6)

調査区南西端で検出した平面方形の竪穴住居である。住居の北西端が調査区外に延びていたため、竪穴住居の範囲のみを人力で掘削し調査を行っている。住居の北西角と南西側は擾乱により削平されているが、東辺2.86m、南辺2.44mを測る方形を呈する。検出面は標高19.1m前後で深さは0.3mを測る。1～7・9・10層は埋土で8層は貼り床である。貼り床上から壁面に沿って幅5～10cm、深さ4cm程度の壁溝(11・12層)が配されている。南東角から竈にかけては途切れている。貼り床上から掘りこんだ柱穴状の遺構が11基確認された。北東角、南東角、中央部に主柱穴と考えられるものがみられるが、それに対応する南西角には柱穴は見られない。またいずれも深さ10cm未満と浅いことから、窪み部分に礎石を置いて柱の土台もしくは、直接柱を据えたものと考えられる。中央部の布目瓦13は柱穴上にあるが、柱を置くには小さいこと、瓦が若干湾曲することから、柱の土台とは考えにくい。遺構の時期は出土遺物や周辺調査から8世紀後半頃か。

竈 (図7)

竪穴住居東壁中央部に形成された竈である。両袖部分(18層)と焚口から煙道にかけての一部に白灰色粘土が残存している。10・19～21層の灰白色粘質土は竈を形成する粘土の残骸と考えられる。焚口の床面や竈の壁面は被熱により赤変しており、固くなっている。

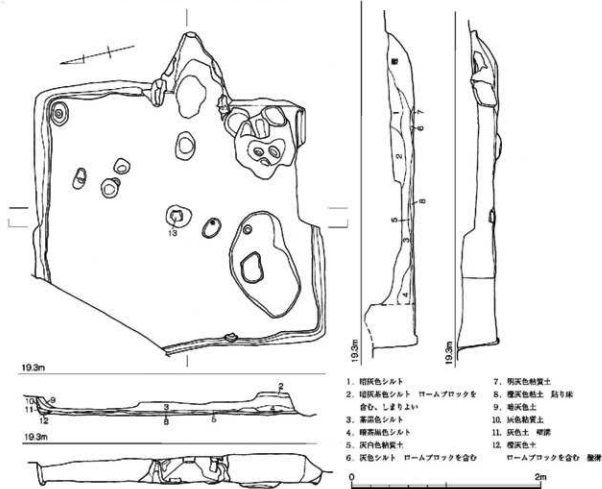


図6 SC030 遺構実測図 (S=1/40)

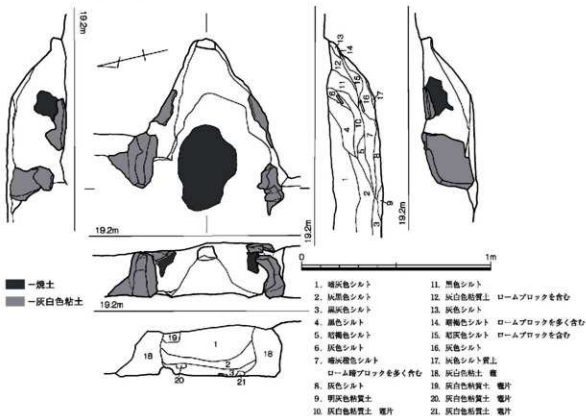


図7 SC030 竈遺構実測図 (S=1/20)

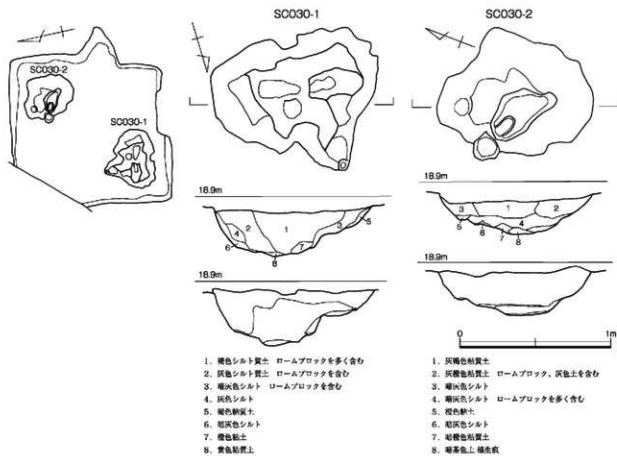


図8 SC030-1・SC030-2 遺構実測図 (S=1/25)

SC30-1 (図8)

貼り床の除去後に検出した土坑で、平面は不定形を呈する。長径1.1m、短径1.08m、深さ0.36mを測る。底面は平らでなく凹凸がある。住居内の多くの面積を占めており、住居に伴ってSC30-2と同時に機能していたとは考えにくい。単独で住居に伴った可能性が考えられる。

SC30-2 (図8)

SC30-1と同様に貼り床の除去後に検出した土坑で、竈の北西側に位置する。平面は不定形を呈する。長径1.03m、短径0.83、深さ0.28mを測る。

出土遺物 (図9)

10は竈、11はSC30-2、他はSC30出土遺物である。1は須恵器の坏蓋。復元口径14.2cmを測る。2～7は須恵器の坏身である。2・3・5～7は高台付坏身である。2は口径19.0cm、高台径12.2cm器高6.5cmを測る。他の須恵器の坏身よりも一回り大きい。内外面に回転ナアを施す。3は内底部に静止ナア、他に回転ナアを施す。4は内外面に回転ナアを施す。5は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。内外面に回転ナアを施す。6は底部からの立ち上がりが若干丸みを持つ。内面に静止ナア、外面に回転ナアを施す。7は内面に静止ナアを施す。8・9は土師器の坏である。8は内面口縁部から外面にかけて回転ナアを施す。9は内外面に荒いナアを施す。10・11は土師器の甕。外面はハケ目、内面は口縁部にハケ目、胴部はケズリを施す。12は土師器の甕の把手。13は平瓦。布目匠痕と縄目叩きを施す。14は鉄釘である。長さ3.4cm、径0.5cmを測る。

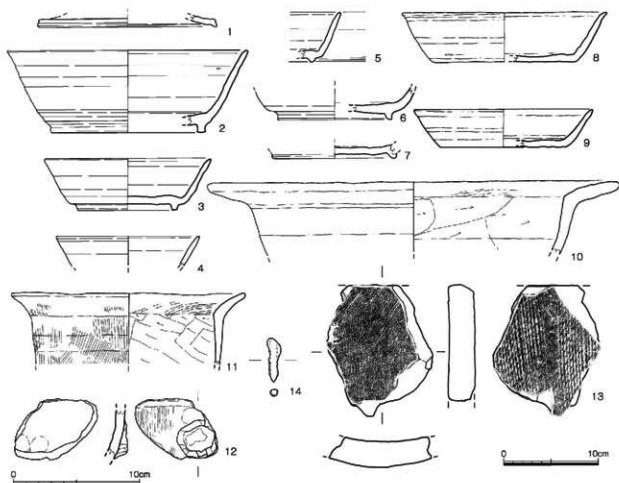


図9 SC30出土遺物実測図 (1~12・14・S=1/3、13・S=1/4)

(2) 掘立柱建物

SB001 (図10)

調査区南西側で検出した掘立柱建物である。SC030を切り、西側柱穴は重機の攪乱によって削平されている。2×2間の掘立柱建物である。桁行長は北側柱列で3.92mである。梁行長は2.0mである。南側柱列の柱間は1.65mを測る。北側柱穴の柱間は2.0m、1.92mと等間隔である。出土遺物は土師器片のみで正確な時期は不明である。

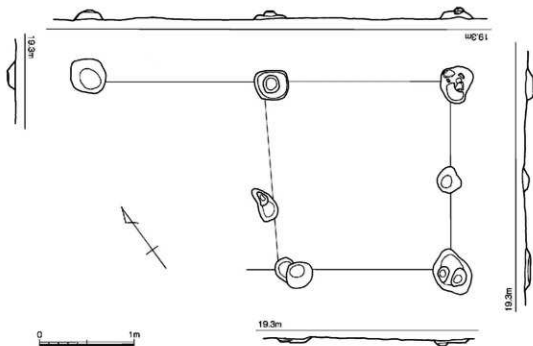


図10 SB001 遺構実測図 (S=1/40)

(3) 不明遺構

斜面に沿ってローム層を浅く掘りこんだ細長い溝状の遺構である。調査区の北東側斜面に並行して5条検出した。斜面に掘られている点や複数本筋状に浅い掘り込みがなされている点、埋土の類似性から第11次調査で検出されたSX09 畝状遺構と同一の性格を持つ遺構と考えられる。本調査で確認された遺構には、溝状の遺構内に柱穴状の掘り込みが列状に並んでいる点の特徴が挙げられ、畑地に由来する畝とは考えにくい。

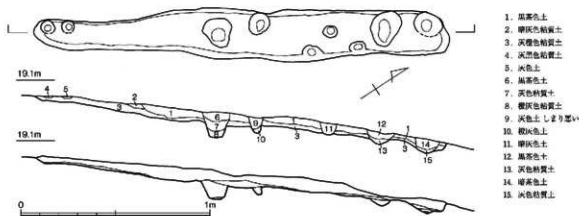


図11 SX077 遺構実測図 (S=1/20)

SX077 (図 11)

基本的な特徴は他の溝状の遺構と共通している。遺構の埋土上から、6つの柱穴状の掘り込みが見られる。溝状遺構の底面を超えてローム面に達するものが多い。柱穴状の掘り込みの埋土のしまりは悪く、柱痕も見られないことから植生痕の可能性も考えられる。

SX078 (図 12)

長さ 1.7m、幅 0.24m、深さ 0.06m を測る。

SX079 (図 12)

長さ 2.45m、幅 0.38m、深さ 0.05m を測る。

SX080 (図 12)

長さ 2.81m、幅 0.36m、深さ 0.05m を測る。柱穴状の掘り込みが浅い。

SX081 (図 12)

長さ 1.18m、幅 0.34m、深さ 0.09m を測る。柱穴状の掘り込みが浅い。

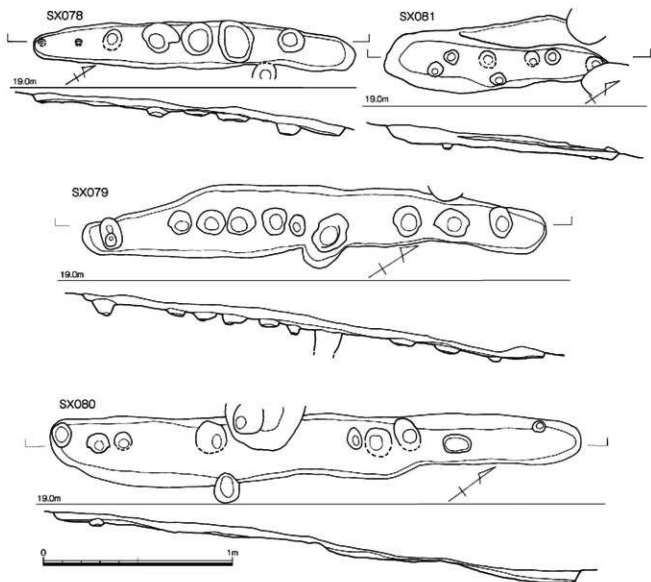


図12 SX078・SX079・SX080・SX081 遺構実測図 (S=1/20)

(4) 土坑

SK070 (図 13・14)

調査区南端で検出した近代の土坑である。遺構のほとんどは調査区外に延びているため、規模や平面形態は不明である。北辺は3.46mを測る。深さ0.7mほど掘削したが調査区の壁が崩落する恐れがあったため、それ以上の掘削は行っていない。西壁にローム層を掘り込んで、階段が作られている。16は染付の湯呑、17は染付の碗である。18は土人形である。恵比寿か。他にも金属製品やガラス容器が出土している。以上の点から本遺構は昭和期の防空壕と考えられる。

SK082 (図 13)

調査区東側に位置する小型の土坑である。長さ0.5m、幅0.33m、深さ0.12mを測る。遺構上層から中層にかけて炭化した木片が集中していた。樹種は不明。出土遺物は無く時期不明。

Ⅳ まとめ

第23次調査では竪穴住居1軒と掘立柱建物1棟、溝状遺構5条、土坑、柱穴、防空壕1基が検出された。竪穴住居の時期は8世紀後半頃とみられ、周辺調査と同時期のものである。掘立柱建物は1棟検出され、出土遺物がないことから詳細な時期は不明ではあるが、周辺調査や遺構の埋土から竪穴住居に近い時期を想定してよいだろう。

竪穴住居や掘立柱建物が丘陵上平坦面の端部に位置し、北側は谷になっていること、周辺調査でも同時期の集落が確認されていることから、本調査地点は8世紀の集落の縁辺部であったことが考えられる。

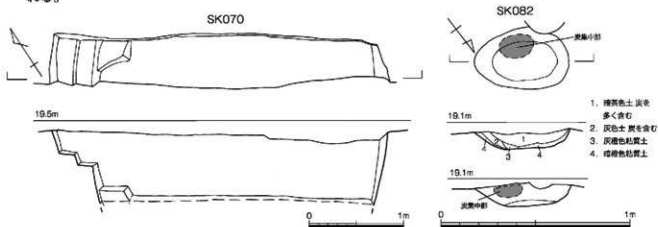


図13 SK070・SK082 遺構実測図 (S=1/40・1/20)

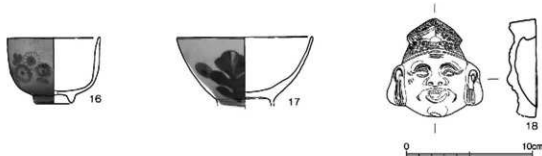


図14 SK070出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph.1 調査区全景 (南東から)



Ph.2 SC030 検出状況 (南東から)



Ph.3 SC030 貼り床検出状況 (東から)



Ph.4 SC030 土層 (南から)



Ph.5 SC030 竈検出状況 (西から)



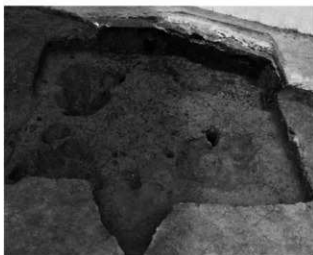
Ph.6 SC030 竈北壁赤変部分 (南西から)



Ph.7 SC030 土層 (南から)



Ph.8 SC030-1・SC030-2 検出状況 (東から)



Ph.9 SC030-1・SC030-2 完掘状況 (東から)



Ph.10 SB001 (南東から)



Ph.11 溝状遺構検出状況 (東から)



Ph.12 SX078・SX079 完掘状況 (南東から)



Ph.13 溝状遺構完掘状況 (北から)



Ph.14 SK070 防空壕 (南東から)



Ph.15 2



Ph.16 3



Ph.17 4



Ph.18 8



Ph.19 9



Ph.20 11



Ph.21 13



Ph.22 18

報告書抄録

ふりがな	みなみはちまにいせき 13							
書名	南八幡遺跡 13							
副書名	第23次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1521集							
編著者名	岩熊 拓人							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2024（令和6）年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
南八幡遺跡	福岡県福岡市博多区竹丘町一丁目15番1号の一部	40132	51	33° 32° 37°	130° 27° 50°	20220627 ～ 20220810	98.9	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
南八幡遺跡	集落跡	古代	竪穴住居／掘立柱建物 ／土坑／柱穴／防空壕		土師器／須恵器／陶磁器 ／瓦／石器／金属製品 ／石器			
要約	<p>南八幡遺跡は御笠川と那珂川との間にある春日丘陵の東辺に並行してのびる丘陵上に位置している。本調査地点は遺跡の東端に位置し、地形としては丘陵の端部になり、北側は谷になっている。遺構は竪穴住居を1軒、掘立柱建物を1棟、構状遺構5条防空壕を1基の他に土坑や柱穴等を検出した。遺物は土師器や須恵器、陶磁器、瓦、黒曜石片などコンテナケース4箱出土している。竪穴住居が丘陵上平坦面の端部に位置し、すぐ北側は谷になっていることや、他に住居と考えられる遺構が見られないこと、周辺調査で同時期の集落が確認されていることから、本調査地点は8世紀後半頃は集落の縁辺部であったことが考えられる。</p>							

南八幡遺跡 13

—第23次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1521集

2024(令和6)年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

印刷 有限会社 アートプロセス
福岡市南区高木二丁目8番7号
(092) 592-3381
